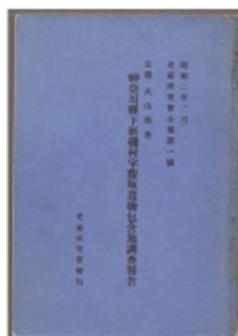


2、大山柏先生による勝坂遺跡の調査

- 1889年 大山巖と捨松の次男として誕生
- 1916年 大山巖没 国葬
→大山柏は後を継ぎ貴族院議員に
- 1923年 ヨーロッパ留学
- 1925年 帰国
- 1926年 勝坂遺跡の調査
- 1927年 勝坂遺跡の報告書刊行 →
- 1928年 陸軍歩兵少佐退役
- 1929年 大山史前学研究所開設
- 1945年 東京大空襲で大山邸焼失
- 1969年 西那須野にて没(享年80歳)



大山 柏 先生
(阿部芳郎2004『失われた史前学』より転載)



大山氏は大正12年(1923)に軍人としてヨーロッパに留学した際、ベルリン大学のフーベルト・シュミットに師事して旧石器時代から中石器時代を研究し、大正14年(1925)の春に帰国した。富田議員でもある大山氏の邸宅は東京都渋谷区藤田にあり、ヨーロッパより持ち帰った膨大な書籍や考古資料の整理が行われていた。

大正15年(1926)の夏、勝坂の素封家中村忠亮氏が自宅裏の畑を掘り起こした際、土器が大量に出土した。この光景に出くわしたのが、休暇で滞留していた学生の清水二郎である。聞き取り調査によると、清水氏の叔父は大山邸で従事していたらしく、清水氏は勝坂で採集した土器2片を携えて大山邸を訪れた。提供された土器2片を見た大山氏は、それまで着てきた縄文土器とは「やや趣を異にしたもの」との所見を得て、同年10月3日に「扶植」調査を実施するに至った。

勝坂遺跡の報告書初版本
(相模原市立博物館所蔵)

打製石斧



(大山 柏 1927『神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告』)



多量に出土する打製石斧 国内外の出土事例 民族誌事例 石皿等との共伴

土掻きの道具

原始農耕の提唱

この調査で大山氏が特に注目したのが、多量に見出された打製石斧である。打製石斧の形態、製作、石材について記載し、ヨーロッパなどの出土事例や民族誌事例、国内の出土事例や石皿などの植物加工具との共伴関係に言及し、多角的視点から打製石斧を「土掻き」の道具と考えるとともに、「原始農耕」の存在を想定した。この着想は調査時に既に持っていたらしく、もとを辿ればドイツ留学中にフーベルト・シュミットに教わっていたことを晩年記している(大山1965)。



H.シュミット
(阿部芳郎2004『失われた史前学』より転載)

「必ずしも器具をもって土地を耕すことのみでなく、もっと消極的な、**有用植物の保護、すなわちこれが繁茂を計るということも考えねばならない**」(大山柏1927)

⇒ 縄文農耕論における今日的な管理栽培の視点
良好な環境が残る勝坂遺跡での調査研究の方向性

縄文中期土器編年と年代観

新	古	加曾利E4式	4,520~4,420calBC	100年間	480年間
中期後葉	加曾利E3式	加曾利E3式	4,710~4,520calBP	190年間	
		加曾利E2式	4,810~4,710calBP	100年間	
		加曾利E1式	4,900~4,810calBP	90年間	
		勝坂3式	5,080~4,900calBP	180年間	480年間
勝坂2式	5,280~5,080calBP	200年間			
勝坂1b式	5,320~5,280calBP	40年間			
勝坂1a式	5,380~5,320calBP	60年間			

※calBCは放射性炭素年代値をより正しい年代値に校正し、1950年から起算した年代を示したものの、

(縄文土器の図は小林達彦 2002『縄文土器の研究』より転載、土器型式の年代幅は小林謙一2008『縄文時代の暦年代』による)

3. 勝坂遺跡の調査と保存



- 大正15(1926)年 大山柏による発掘調査
- 勝坂式土器の発見と原始農耕論の提唱
- 昭和36(1961)年 岡本勇による分布調査
- 勝坂遺跡をA区、B区、C区に分け、谷戸に流れる湧泉を囲った馬蹄形の集落展開を想定(『相模原市史』1964年)
- 昭和46(1971)年 江藤昭による磯部山谷遺跡(E区)の調査
- 昭和47(1972)年 県教育委員会(調査担当:岡本勇)によるA区の範囲確認調査
- 中期中葉2軒、後葉2軒の住居址を検出し、集落範囲を想定
- 昭和48(1973)年 大規模宅地造成事業に伴う確認調査(第1次調査)
- D区集落の発見 →保存運動「勝坂闘争」→昭和49(1974)年国史跡指定
- 昭和54(1979)年 D区宅地造成に伴う第18次調査
- 昭和55(1980)年史跡追加指定
- 昭和58(1983)年 D区宅地造成に伴う第31次調査
- 昭和59(1984)年史跡追加指定
- 平成17(2005)年 A区宅地造成に伴う第67次調査
- 平成18(2006)年史跡追加指定
- 平成13~18(2001~2006)年度 史跡整備に伴う発掘調査
- 平成21年度に竪穴住居2軒、敷石住居1軒、廃絶住居窪地3箇所を復元
- 平成19~24・27年度 D区下段から低湿地面の有底谷地点の調査
- 令和元(2019)年史跡追加指定(指定面積42.95㎡)

勝坂遺跡D区の集落

【勝坂遺跡D区北集落】

- 中期後葉～末葉の集落
- 住居址27軒の発見
- 環状集落と考えられるが不明
- 集落範囲は70～150m



竪穴住居跡の石囲炉周辺の敷石と立石

【勝坂遺跡D区南集落】

- 中期後葉～末葉主体の集落
- 住居址55軒の発見
- 環状集落とみられる
- 集落範囲は南北100～120m



土葺住居復元モデルとした3号住居跡



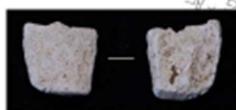
4号住居跡出土の勝坂式土器片



勝坂遺跡A区の集落

【勝坂遺跡A区集落】

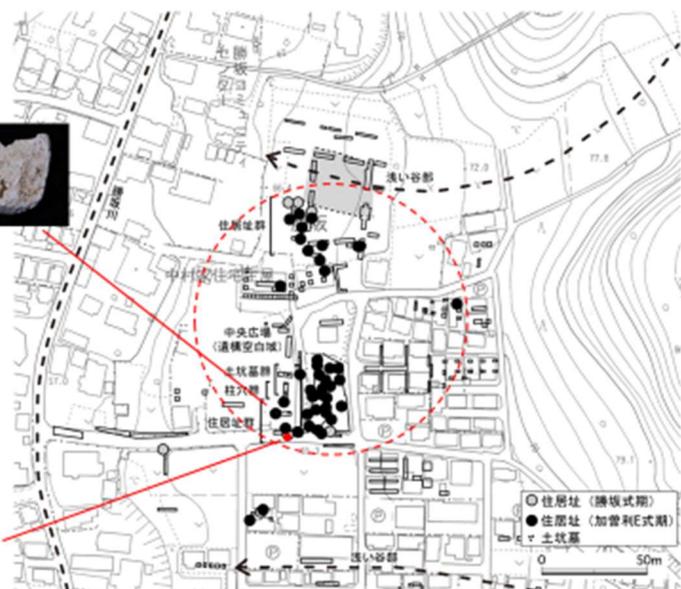
- 中期中葉～後葉の集落
- 北と南に浅い谷が入る
- 住居址51軒の発見
- 中央広場をもつ環状集落
- 集落範囲は南北110～150m



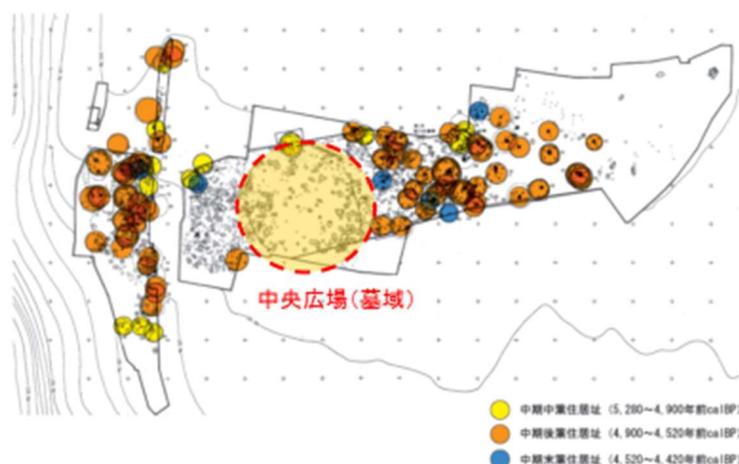
土坑出土の焼骨



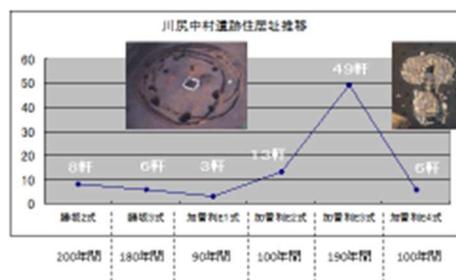
住居跡床面直上での勝坂式土器等の遺物出土状況



環状構造を規定する中央広場



- 推定で300軒以上の集落跡になるかと推定されるが、実際の一時期の住居構成は数軒～10数軒程度になると見込まれる。
- 竪穴住居のライフサイクル研究でも、1軒の住居の耐用年数は数年～十数年と見積もられている。
- 数百年間にわたり侵されることのない神聖な空間として中央広場(墓域)を保持した強い社会的規律により、環状に展開した「住居跡」が書ききされていったことが、環状集落跡の構造。



中期環状集落跡の構成②

— 当麻遺跡第3地点(田名花ヶ谷戸遺跡) —

4次にわたる大規模な発掘調査が行われている。中期中葉～後葉の大規模な環状集落跡で、中央広場からは土坑墓群からなる墓域が形成され、中央広場北西部には住居跡と中央広場を区画する環状列石の一部が発見されている。中期末～後期初葉には柳葉形敷石住居跡に移り変わり継続される。中央広場の内径は30～40m、集落範囲の外径は150m程に広がる。発見された中期の竪穴住居跡は計193軒、中期末～後期初葉の柳葉形敷石住居跡は19軒の合計212軒数える。



中央広場を区画する環状列石 (第1次調査)



当麻遺跡第3地点空撮(第4次調査)



重複する住居跡群(第4次調査)



※本遺跡配置図は調査主体者の埼玉文化財研究所より提供いただきました。

5. 縄文時代の住まいを考える



勝坂遺跡O区南集落3号住居跡 (土器住居復元モデル)

焼失住居から探る竪穴住居(下中丸遺跡)



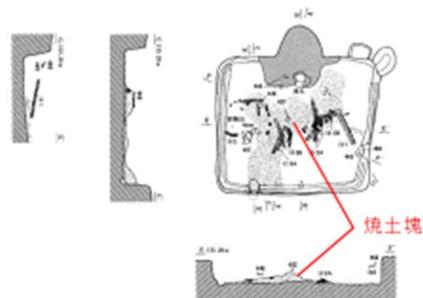
①床面より上で焼土塊が検出される ②床面は焼土化し炭化材が検出される ③柱穴、周溝、竪穴壁が検出される。

- ・中期中葉勝坂式期の竪穴住居跡で、竪穴覆土中から多量の炭化材や焼土塊が発見されることから、住居が焼けた後に放棄された焼失住居と考えられる。
⇒床面上の焼土塊は、住居焼失時に土葺の屋根材が崩落して焼けた可能性が高い。
- ・竪穴壁際から垂木状の炭化した丸太材などが発見される。
- ・周溝上の竪穴壁に板状の炭化材が張り付いたような状態で発見される。
⇒周溝は竪穴壁の土留め用の木材を埋め込んだ溝か？
- ・柱穴上面に丸太状の炭化材 ⇒直径20cmの柱



文献にみる竪穴住居

- ・『日本書紀』:古墳時代の東日本に暮らす蝦夷についての一説 「夏は巢に寝、冬は穴に住む」
- ・冬に穴状の住まい(=土葺の竪穴住居)で暮らしていたことが読み取れる。
- ・日本のポンペイともいわれる群馬県黒井釜遺跡は、榛名山の麓に占拠し、古墳時代後期(6世紀代)の大きな火山爆発により、集落は降り積もった火山灰に覆われる。発掘調査の結果、代掻きされた水田跡の検出から噴火は5~6月頃の春に発生したとみられ、竪穴住居内には土器等の生活道具が一切なく、平地住居内には竈周辺の土間に竈、竈上の棚には須恵器坏などが置かれた状態で検出され、夏の平地住居と冬の竪穴住居の住み分けがされていたことが判明する。



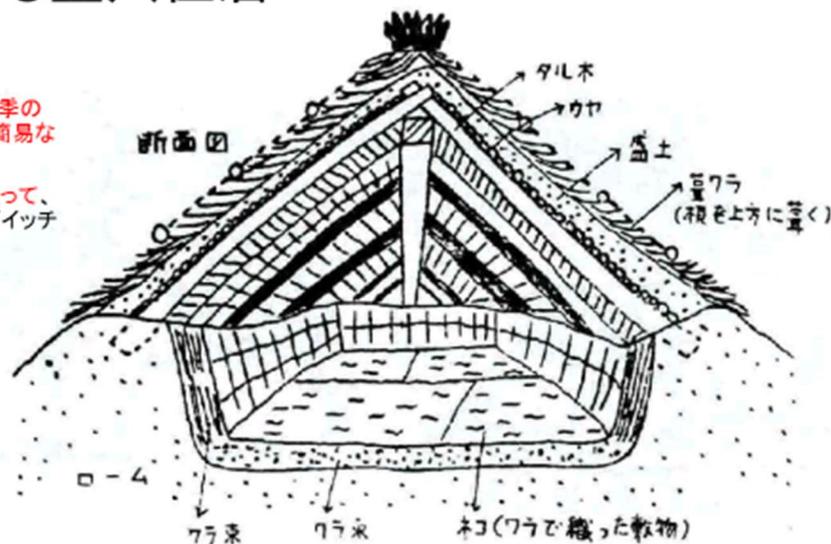
相模原市矢掛・久保遺跡の古代の焼失住居
(土葺の天井中心が落ちて焼土塊となったものか)



御所野遺跡の土葺き住居焼失実験後の平面図
(天井中心が落ちる)
(一戸町教育委員会 2004『御所野遺跡環境整備事業報告書Ⅰ』)

民俗誌にみる竪穴住居

- ・信州の「穴倉」
- ・信州では昭和初期まで冬季の藁仕事・糸紡ぎ作業用に簡易な竪穴住居を建てた。
- ・屋根が葺の下地に土を盛って、その上に藁葺としたサンドイッチ構造をとる。



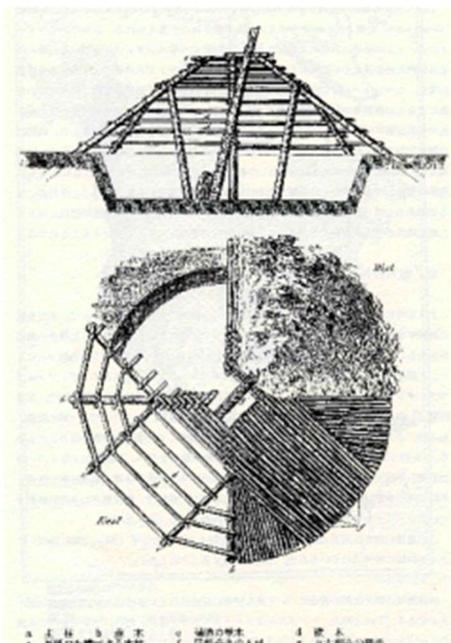
(村田文夫 2008『縄文のムラと住まい』)

民族誌にみる竪穴住居

- 民族誌によれば、**竪穴住居は北太平洋沿岸文化圏の中・高緯度帯の狩猟採集民がよく利用する居住施設。**
- 竪穴住居は時代の流れとともに20世紀初頭にはほとんど利用されなくなりましたが、探検家や毛皮交易商人、宣教師等が残した民族誌からその様子が窺える。
- トンプソン族はアメリカ・カナダ国境に近いトンプソン川上流域をテリトリーとする狩猟採集民。**冬は竪穴住居、それ以外はマットハウス(テント)等の仮小屋に住み、居住拠点を季節的に移動する生活形態をとる。住居は15~30人が居住する。建設は20~30人が集まり、1日で完成することもあるという。**



トンプソンの竪穴住居



(武蔵康弘 1906「民族誌からみた縄文時代の竪穴住居」)

竪穴住居の生態学的機能

- 相模原市内の良好な遺存状態の竪穴住居だと、**竪穴の深さは70~80cm程**を測る。寒冷な北海道などでは2mにもなる竪穴住居も多く発見されている。
- 竪穴を寝床とすることで、冬季の寒さから逃れる。冬の星空の夜は放射冷却によって地中まで凍りつく。**凍結深度**は例えば現在の長野県松本では40.5cmであり、これ以上**深い竪穴なら寝床の凍結を回避できる。**(藤森照信)
- 土葺きで密閉することにより、**土葺き屋根が断熱効果**をもち、**保温性の高い住居**となる。(渡辺仁)
- 保温性が高いことにより、薪燃料の節約される。(渡辺仁)



勝坂遺跡D区南集落 3号住居跡(土葺住居復元モデル)

縄文時代の竪穴住居も「冬の家」として使用され、縄文ムラの人々は季節によって住まいの住み分けをするような住まい方(居住形態)をとっていた可能性も考えなければいけない。

6. 石囲炉と石囲いが無い炉



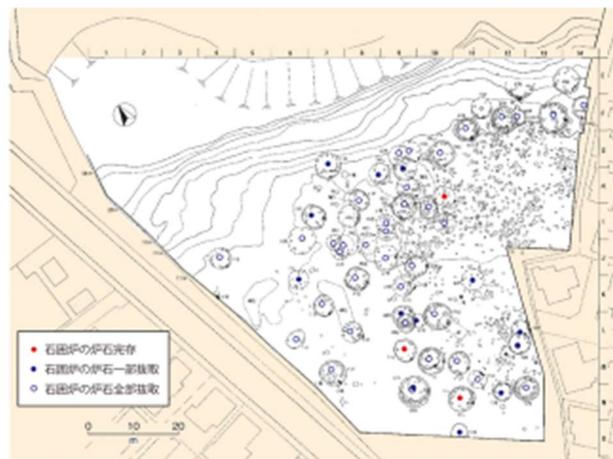
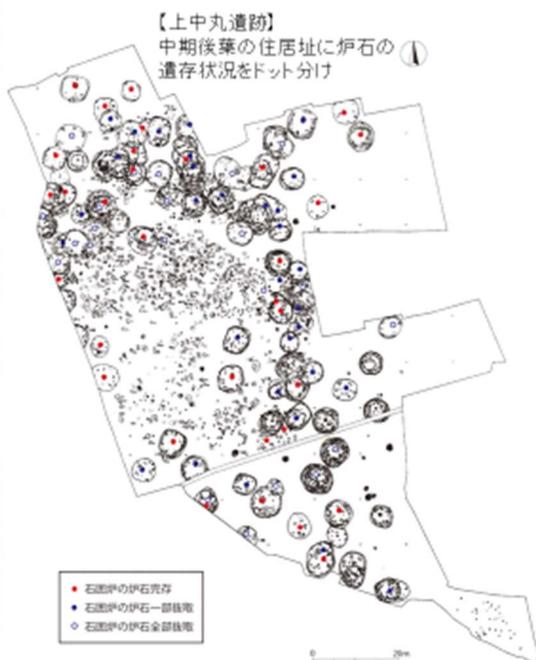
炉石が半分抜けている(田名花ヶ谷戸遺跡)



2基重複の炉とも炉石が抜けている(勝坂遺跡)



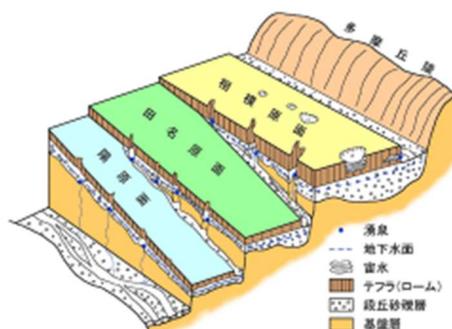
姥川沿いの上中丸遺跡(炉石がない炉もあるが、多くは炉石が残る)



【山王平遺跡】
中期後葉の住居址に炉石の遺存状況をドット分け

石囲炉でみる住居の住替えと石材環境

- 相模原面に流れる境川の河床は、古相模川による段丘礫層が河床よりも下位にもぐっているため、大きい河原石(礫層礫)に乏しい。対して田名原面に流れる鳩川・姥川・道保川の河床は、段丘礫層が河床に表出していたり、段丘崖裾に礫層の露頭として表出しているため、大きい河原石が豊富にある。
- 竪穴住居の構築＝石囲炉の構築
→ ① 炉石の獲得・搬入・設置(新設)
② 造り替え前の竪穴住居の炉石の再利用(移設)
- 竪穴住居の耐用年数は、民族誌事例や先行研究によれば、数年～10数年程しかもたない。
- 山王平遺跡や橋本遺跡、下森鹿島遺跡など、**炉石に適した石材環境の乏しい境川流域沿いの集落では、竪穴住居の造り替えのために炉石を旧住居から抜き取って再利用している状況が見えてくる。**
- 山王平遺跡の縄文集落は加曾利E2～加曾利E3式期にほぼ限定されるが、300年間前後の集落期間と想定される。
- 炉石が居住単位で引き継がれていった？
- 炉石が抜き取られずに完全に残った住居址とは、集落末期の住居址を示しているのだろうか？



7. 縄文時代中期の大形の集石土坑

【集石土坑とは】

- 拳大程度の石が密集した状態で発見される遺構で、地面に穴を掘って(=土坑)造られているものが多い。
- 石は焼けて赤くなっているものが多く、煤やタール状の黒色付着物がみられるものの、熱によって破砕しているものがある。
- 縄文時代早期から数多くみられるポピュラーな遺構であるが、**中期中葉の段階に大形化したものが登場し、かつ増加する。**
- その機能は、**焼いた石を熱源として、石蒸しによる焼石調理施設**と考えられている。



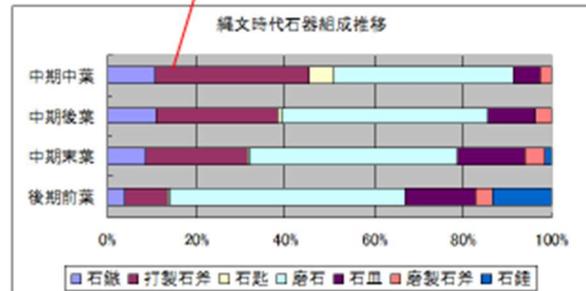
下原遺跡A地区 43号集石土坑

大形の集石土坑は何を語る？

- 大形の集石土坑は、地面を掘り込んだ穴の底に、花弁状の敷石をして、その上で相当の燃料を燃やしている。
- 土坑の壁が焼土化するほど燃えている途中で、拳大の石を大量に入れ込んで、熱をもたせる。そのため、燃料は不完全燃焼となり、集石下部で炭化材として残りやすい。
- 遺構の遺存状況からみて、調理施設としては単発での使用とみられる。
- **中期初頭～中葉にかけて多く検出され、中期後葉になるとやや減少傾向となる。**
- 同様に土堀具の打製石斧の増大・減少と連動しており、**根茎類利用との関連性が指摘されている。**
- 石材環境の乏しい境川沿いや津久井山間部では、相模川中流域の集落に比べて検出数が少なく、**生業の差異を反映しているか？**
- 集落における住居址・集石土坑検出数を比率でみると、**竪穴住居が数年～十数年の耐用年数とした場合、集石土坑の構築機会＝焼石調理はごく稀な機会となる。**
- 民族誌の事例では、儀礼等のハレの日の料理で構築されることが多い。



勝坂遺跡出土の打製石斧



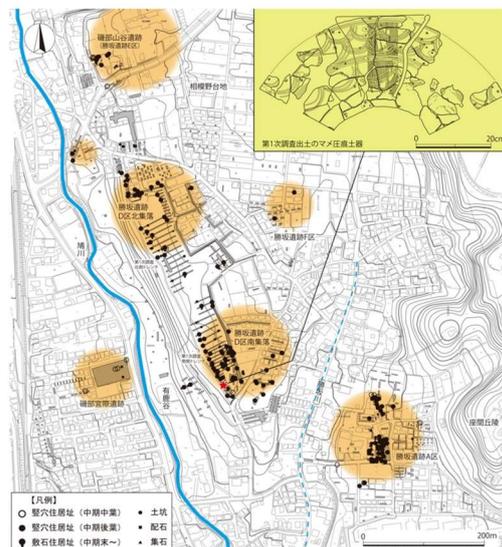
※中期のデータは川尻中村遺跡、後期のデータははじめ沢下遺跡などの合計割合

中期中葉では根茎類採取の比重が高いが、時期が下るにつれ、堅果類の加工具の比重が高くなり、後期前葉は特に顕著に割合となる。また、後期になると河川漁撈の比重の高まりが認められる。

8. 植物種実圧痕土器の資料調査

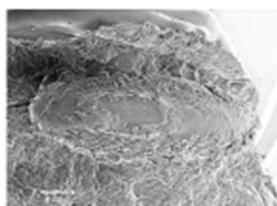


勝坂遺跡D区出土のママ圧痕土器(相模原市指定有形文化財)

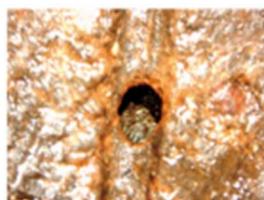


種実圧痕にみる 勝坂遺跡の植物利用

- 植物種実が土器づくりの際に粘土に混入した圧痕土器は、土器片で220点に1点(0.45%)程度である。
- 種実圧痕には、ブドウ科、クリ、サンショウ属？、ミズキ、ダイズ属、ササゲ属アズキ亜属、マメ科、シソ属といった、食用などとして利用可能な種実が多かった。
- ミズキやダイズ属、ササゲ属アズキ亜属、シソ属は、関東地方の各遺跡でしばしば共通する組成。
- 利用可能な種実を主体に、一種類に偏らない多様な種実圧痕が確認された。



ダイズ属のSEM画像



圧痕 No. 11 (アカメガシワ種子)



圧痕 No. 27 (ミズキ核)



圧痕 No. 30 (ダイズ属種子)



圧痕 No. 31 (ダイズ属種子)



圧痕 No. 38 (マメ科種子)



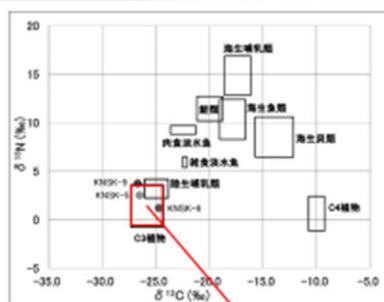
圧痕 No. 48 (ダイズ属種子)

9. 縄文土器のオコゲから食物を調べる

- 土器内面に付着した炭化物(オコゲ)を試料分析対象として、炭化物の炭素と窒素の安定同位体比を測定し、食物資源または食物利用を推定する分析方法。
- 炭素の同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)と窒素の同位体比($^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$)を求め、これを既知の食物の炭素・窒素安定同位体分布図と照合し、食物の内容物を推定する。
- 土器内面の付着炭化物は0.1g程度あれば分析可能。



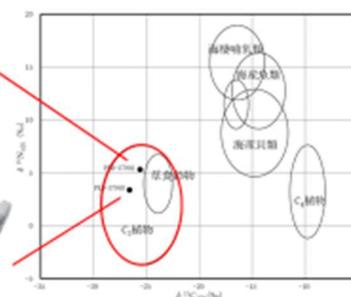
田名塩田遺跡群出土の真脇式土器(前期末)
(相模原市指定有形文化財)



- C3植物: クリ・クルミ等の堅果類やダイズ等のマメ類、エゴマ等を含む植物
- C4植物: イネ科植物等



田名塩田遺跡群
真脇式土器(前期末)



勝坂遺跡D区南集落 3号住居跡出土の中期後葉の土器

(西本志保子ほか 2021「勝坂遺跡出土土器の炭素14年代測定及び炭素・窒素安定同位体比分析」)

川坂遺跡
五領ヶ台式土器(中期前葉)

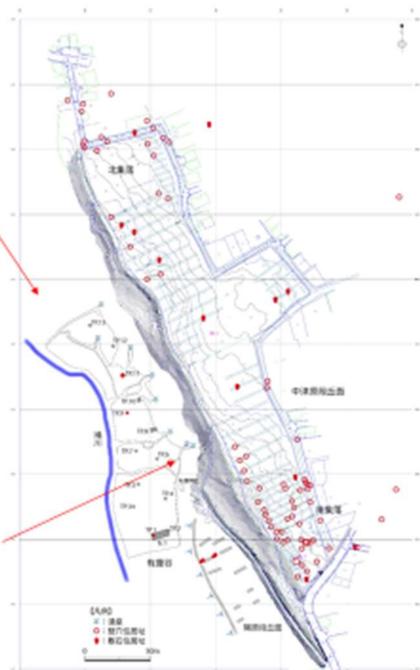
10. 勝坂遺跡 有鹿谷の調査



段丘崖裾から湧き出る泉



鳩川沿いの有鹿谷は湧水を利用した谷戸田の景観を残している



花粉分析にみるクリの管理栽培

- 縄文時代中期中葉(勝坂式期)の泥炭層から、クリ花粉が45%の項出現率で検出された。

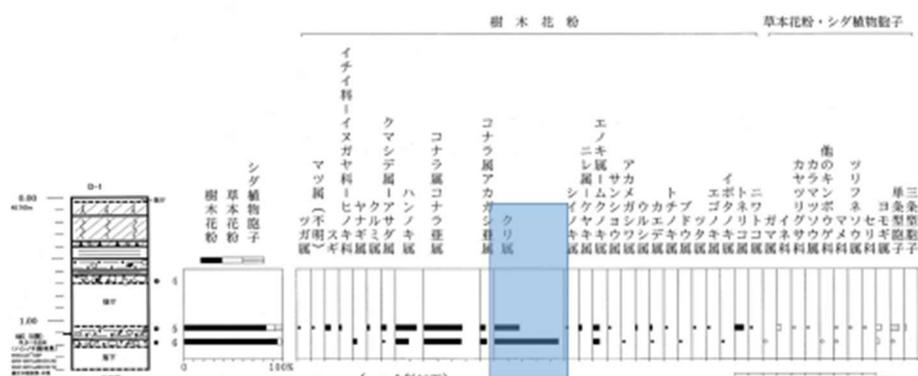
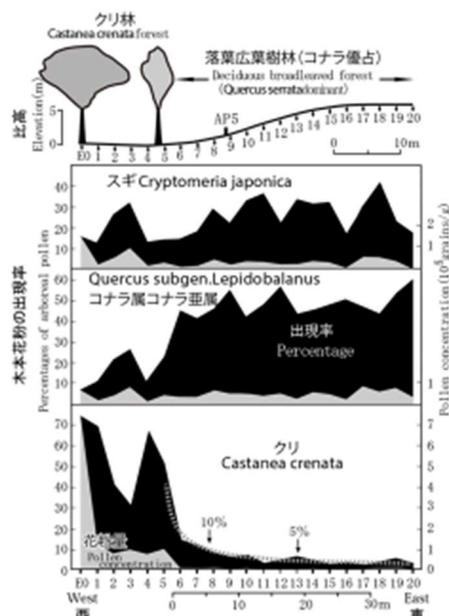


図6 勝坂遺跡D-1地点の土層花粉化石分布図
(樹木花粉は樹木花粉動物、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基準として百分率で算出した)

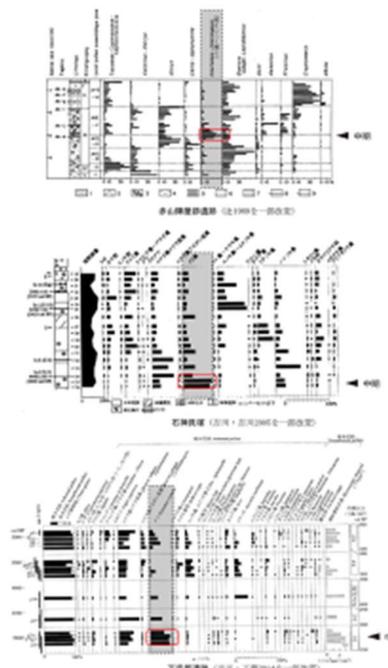
クリ林と クリ花粉

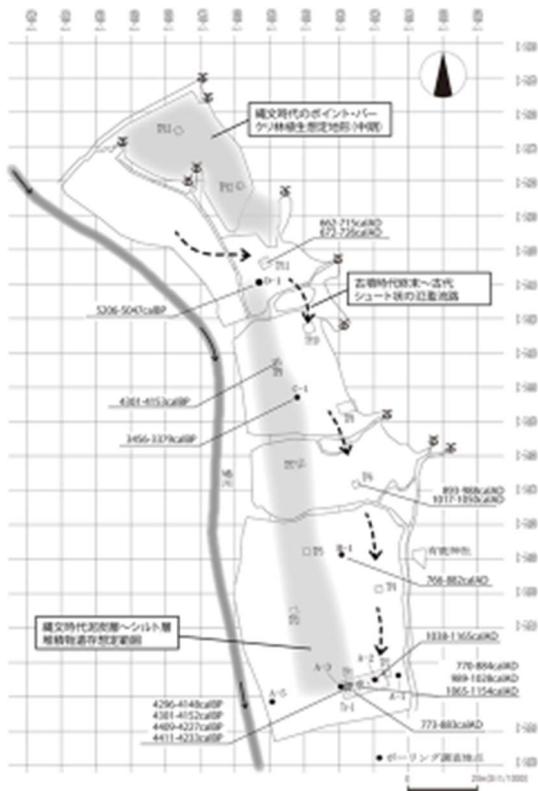


虫媒花であるクリの花粉は飛散しにくく、クリ林内で表層花粉の30~60%以上を占めるが、林縁から離れると急減し、約6mで10%、約20mでは5%以下と減少し、約200mでは1%以下で散布範囲が狭い。



(吉川昌信 2011「クリ花粉の散布と山内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況」)





相模野台地の縄文ムラ

- 相模野台地における縄文時代中期の集落分布上の濃淡は、湧水環境と有機的な関連性が認められる。境川流域や鳩川上流域のように、河川沿いであっても集落分布が発達しない状況は、当時のムラづくりの土地選定にあたって、河川よりも湧泉の水利が求められていた。
- 湧水環境を基点に、群集する中期のムラは、中期中葉(勝坂式期)から始まり、中期後葉へと継続され、縄文ムラの営続期間は数百年にも及ぶ。
- 勝坂遺跡の学史的な重要性の一つは、大山柏先生による「原始農耕」の提唱による、縄文文化における有用植物の管理栽培の視点を示したことであり、今日の縄文研究に適応する。
- 集落が営まれ、維持し続け、縄文ムラが繁栄した背景として、クリの管理栽培やマメ類など多角的な植物資源利用があり、それら維持・管理された植生環境や湧水環境などを含めて、相模野台地の縄文ムラの景観が形成されている。



(参考文献)

神奈川県教育委員会 2024『令和6年度かながわの遺跡展 縄文ムラの繁栄』
 財団法人かながわ考古学財団 2010『掘り進められた神奈川の遺跡』有隣堂
 公益財団法人かながわ考古学財団編 2024『足元に眠る神奈川の歴史』有隣堂
 工藤雄一郎／国立歴史民俗博物館 編 2014『ここまでわかった！縄文人の植物利用』新泉社
 小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学2 歴史のものさし』同成社
 小林達雄 2002『縄文土器の研究』学生社
 相模原市 2009『相模原市史 自然編』
 相模原市 2012『相模原市史 考古編』
 谷口 肇 編 2023『日本史のなかの神奈川県』山川出版社
 中山誠二 2020『マメと縄文人』同成社
 藤森照信 2005『人類と建築の歴史』筑摩書房
 村田文夫 2006『縄文のムラと住まい』慶友社